

Title	感情教示法を用いた幸福と怒りの表情表出における日韓比較
Author(s)	趙, 鏞珍; 高橋, 直樹; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 7 P.61-P.65
Issue Date	2007
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/11766
DOI	10.18910/11766
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

感情教示法を用いた幸福と怒りの表情表出における日韓比較^{1) 2)}

高橋直樹(早稲田大学人間科学学術院)

大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

趙 鏞珍(大韓民国 韓瑞大学校美容学科・顔研究所)

本研究では、感情教示法を用いて、幸福と怒りの表情についての日韓比較をおこなった。その結果、日本人と韓国人とは、幸福と怒りの表情についての明確な相違があり、日本人よりも韓国人が幸福や怒りの表情を必ずしも強く表出するとは言えないことが明らかになった。この結果を考えるならば、文化と結びついた表示規則の存在は無視できない。本研究における実験は、参加者と実験者が同室して行われた。このことが幸福と怒りの表情表出を抑制させる要因の一つとなったと考えられる。感情の表示規則の働きについて厳密に理解するためには、両国の文化について深く検討する必要がある。

キーワード: 表情表出、表示規則、文化比較、幸福、怒り

問題

人間の感情表出における重要な要素である表情については、文化や人種などを超えた普遍的な部分と、文化や人種などの相違だけでなく性差やパーソナリティなどといった個人差によって大きく変容する部分がある。これまでの表情研究においても、表情表出および解読における文化差(e.g., Ekman & Friesen, 1975)や個人差(e.g., 大坊・高橋・磯・橋本, 2001)について詳細に検討した研究は非常に多い。ただし、個人差については社会的スキルやパーソナリティなどを中心に数多くの研究成果が積み重ねられているのに対し、文化差の方は主に日米比較など多くの研究がなされているものの、同じ文化圏(とりわけアジア)内における比較研究は、顔形態特徴に関しては最近おこなわれつつあるものの(e.g., 大坊・上出・趙・高橋, 2005; 上出・大坊・趙・高橋, 2005)、感情の表情表出に関しては今後の研究課題であると思われる。また、日本人の表情というものを定義するためには、(もちろん欧米諸国との比較研究も必要であるが)韓国や中国などといった日本の近隣諸国との比較研究は必須である。本研究では、韓国や中国なども含めたグローバルな文化比較研究を行うことを視野に入れた上で、幸福と怒りの表情表出における日韓比較について報告する。

目的

日本と韓国は地理的には非常に近い存在であるが、日本人と韓国人の感情表出については異なる部分が多いように思われ、一般的には、日本人は感情を抑えるが、韓国人は感情を抑えないといわれている。しかし、心理学分野において、このような仮説を検証したような比較文化的非言語行動実験はなされていないように思われる。本研究では、このような仮説の検証も含め、日本人と韓国人における感情表出の相違について明確にするため、

人間の基本感情である幸福と怒りを取り上げ、その表情表出における日韓比較を行う。当然、その延長線上には、多種類の感情を扱った包括的な感情研究と、中国なども含むアジア各国の文化圏を比較対象とした総合的な比較文化的研究をも視野に入れている。本研究は、このような大規模な比較文化的感情研究のプロトタイプとして位置づけられる。なお、今回の研究では、日本人と韓国人の幸福と怒りの表情表出における相違を調べることに主眼を置いているため、男女比較やパーソナリティなどの個人差の分析については、別に報告する。

方法

日本人

研究参加者と測定時期 大阪の総合大学(人間科学部)の大学生 32 名(男性 8、女性 24; 平均 20.31 歳、 $SD = 0.74$)を対象とした。なお、この研究は、2002 年 2 月の学期中に個別に実施し、参加者には、一律に謝礼を提供した。

測定手続き この研究では、感情表出時の顔面表情の動画撮影を行った。デジタルビデオカメラを参加者の正面に設置し、モニターに参加者の顔が中央に収まるように調整した上で、表出者は、怒りを含む 7 種類の基本感情語を、実験者によって口頭で聞かされ、各表情を自由に表出するよう求められた。表出者は無表情から始めて、表情表出が終わったら無表情に戻すよう教示され、その一部始終がデジタルビデオテープに録画された。

測定装置 動画の撮影には、ソニーのデジタルビデオカメラ(DCR-TRV20)を使用した。分析には、SONYのPC(PCG-R505/ABW)を使用した。画像の取り込み・分析には PC の付属ソフトウェアである DVgate motion (version 2.2.00) 及び DVgate assemble

(version 2.2.00)を使用した。

韓国人

研究参加者と測定時期 韓国の総合大学(芸術、建築、美容学科)の大学生84名(男性37、女性47; 平均20.52歳、SD = 1.38)を対象とした。なお、この研究は、2004年11月の学期中に個別に実施し、参加者には、一律に謝礼を提供した。

測定手続き 測定手続きは日本人を対象とした研究と同様であるが、この研究では、表出者は、幸福と怒りの2種類の感情語を、実験者によって口頭で聞かされ、各表情を自由に表出するよう求められた。

測定装置 動画像の撮影には、ソニーのデジタルビデオカメラ(DCR-TRV107K)を使用した。分析には、SONYのPC(VGN-E72B)を使用した。画像の取り込み・分析にはPCの付属ソフトウェアであるDVgate Plus(version 2.0.00.10260)を使用した。

結果

幸福の表情表出において観察されたAU

感情教示法を用いた日本人と韓国人における幸福の表情表出について、FACS(Facial Action Coding System; Ekman & Friesen, 1978)を用いて、日本人と韓国人の表出者が示した顔の動き(Action Unit; AU)を集計したものをTable 1に示す。

日本人と韓国人に示されたAUの頻度の差について、Z検定により調べたところ、AU6・AU20・AU43・AU53・AU64は日本人において有意に多くみられ、AU11・AU12・AU17・AU19・AU26・AU55は韓国人において有意に多くみられることが分かった。

怒りの表情表出において観察されたAU

感情教示法を用いた日本人と韓国人における怒りの表情表出について、FACSを用いて、日本人と韓国人の表出者が示した顔の動き(AU)を集計したものをTable 2に示す。

日本人と韓国人に示されたAUの頻度の差について、Z検定により調べたところ、AU4・AU9・AU13・AU24・AU25・AU54・AU58・AU63・AU64は日本人において有意に多くみられ、AU11・AU17・AU28・AU52・AU55・AU56は韓国人において有意に多くみられることが分かった。

考察

幸福の表情表出における日韓比較

本研究における一連の日韓比較研究においては、日本人よりも韓国人の方がストレートな感情表現を示すであろうという事前の予測があったが、今回の研究結果は、その予測とは異なる結果が得られた。

Table 1 幸福の表情において観察されたAUと頻度(%)

幸福	日本	韓国	Z
AU1:眉の内側を上げる	12.9	10.7	0.040
AU2:眉の外側を上げる	12.9	9.5	0.247
AU4:眉を下げる	6.5	0.0	1.612†
AU5:上瞼を上げる	0.0	3.6	0.432
AU6:頬を持ち上げる	41.9	23.8	2.86**
AU9:鼻に皺を寄せる	0.0	2.4	0.078
AU10:上唇を上げる	3.2	0.0	0.540
AU11:鼻深溝を深める	41.9	81.0	7.387*
AU12:口角を上げる	64.5	83.3	2.799*
AU13:頬を膨らませる	0.0	1.2	-0.515
AU14:笑窪をつくる	19.4	8.3	1.597†
AU15:口角を下げる	3.2	6.0	0.142
AU16:下唇を下げる	3.2	0.0	0.540
AU17:下顎を上げる	0.0	17.9	2.513*
AU18:唇をすぼめる	3.2	1.2	-0.050
AU19:舌を出す	0.0	15.5	2.228*
AU20:唇の端を横に引く	51.6	40.5	2.768*
AU24:唇を押さえつける	32.3	39.3	1.079
AU25:唇を離す	77.4	72.6	0.489
AU26:顎を下げる	3.2	47.6	7.203*
AU27:口を大きく開く	0.0	2.4	0.078
AU28:唇を吸い込む	3.2	10.7	0.999
AU30:顎を左右にずらす	0.0	1.2	-0.515
AU32:唇を噛む	0.0	4.8	0.700
AU36:舌で頬を突き出す	0.0	1.2	-0.515
AU37:舌で唇をふく	0.0	1.2	-0.515
AU43:眼を閉じる	9.7	0.0	2.365*
AU44:細目にする	12.9	8.3	0.469
AU45:瞬きをする	93.5	89.3	0.403
AU51:顔を左に向ける	3.2	3.6	-0.480
AU52:顔を右に向ける	0.0	3.6	0.432
AU53:顔を上に上げる	32.3	11.9	3.08**
AU54:顔を下に下げる	9.7	2.4	1.29†
AU55:顔を左に傾ける	9.7	23.8	1.831*
AU56:顔を右に傾ける	16.1	16.7	-0.204
AU57:顔を前に出す	0.0	3.6	0.432
AU58:顔を後ろに引く	12.9	3.6	1.58†
AU61:眼球を左に向ける	29.0	19.0	1.308†
AU62:眼球を右に向ける	6.5	13.1	0.787
AU63:眼球を上に向ける	9.7	9.5	-0.332
AU64:眼球を下に向ける	25.8	13.1	1.769*

† p < .10, * p < .05, ** p < .01

Table 2 怒りの表情において観察されたAUと頻度(%)

怒り	日本	韓国	Z
AU1:眉の内側を上げる	6.3	15.5	1.197
AU2:眉の外側を上げる	6.3	13.1	0.840
AU4:眉を下げる	62.5	53.6	2.087*
AU5:上瞼を上げる	0.0	3.6	0.454
AU7:瞼を緊張させる	59.4	56.0	0.567
AU9:鼻に皺を寄せる	9.4	1.2	1.702*
AU10:上唇を上げる	3.1	1.2	-0.070
AU11:鼻深溝を深める	15.6	28.6	1.721*
AU12:口角を上げる	9.4	6.0	0.292
AU13:頬を膨らませる	12.5	1.2	2.359**
AU14:笑窪をつくる	6.3	0.0	1.577†
AU15:口角を下げる	3.1	8.3	0.647
AU16:下唇を下げる	0.0	1.2	-0.497
AU17:下顎を上げる	12.5	47.6	6.254**
AU18:唇をすぼめる	3.1	0.0	0.522
AU20:唇の端を横に引く	37.5	41.7	0.640
AU24:唇を押さえつける	46.9	29.8	3.061**
AU25:唇を離す	59.4	52.4	1.866*
AU26:顎を下げる	9.4	17.9	1.044
AU28:唇を吸い込む	0.0	10.7	1.667*
AU30:顎を左右にずらす	9.4	4.8	0.564
AU31:歯を食いしばる	0.0	4.8	0.725
AU32:唇を噛む	0.0	1.2	-0.497
AU34:頬を膨らます(閉口)	0.0	1.2	-0.497
AU38:外鼻孔を拡大する	0.0	1.2	-0.497
AU43:眼を閉じる	3.1	2.4	-0.424
AU44:細目にする	12.5	9.5	0.186
AU45:瞬きをする	81.3	84.5	0.235
AU51:顔を左に向ける	6.3	6.0	-0.373
AU52:顔を右に向ける	6.3	22.6	2.198*
AU53:顔を上に上げる	18.8	8.3	1.515†
AU54:顔を下に下げる	46.9	4.8	7.517**
AU55:顔を左に傾ける	15.6	29.8	1.910*
AU56:顔を右に傾ける	6.3	22.6	2.198*
AU58:顔を後ろに引く	15.6	2.4	2.504**
AU61:眼球を左に向ける	21.9	11.9	1.354†
AU62:眼球を右に向ける	15.6	22.6	0.805
AU63:眼球を上に向ける	18.8	6.0	2.050*
AU64:眼球を下に向ける	59.4	27.4	6.858**

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

日本人とコーカソイドの7種類の感情を表す普遍的な標本であるJACFEE(Japanese And Caucasian Facial Expressions of Emotion; マツモト・工藤, 1996)における日本人の幸福の表情を構成するAUはAU6+

AU11 + AU12 + AU25である。その中でも、AU6という目の部分は随意に動かしにくく、AU11 + AU12 + AU25という口の部分は随意に動かしやすいといわれている。つまり、目が笑っていない笑顔は自発的な笑顔とは異なる作り笑いであるとされるので、本研究の結果からは、韓国人の方が作為的な笑いを示していたといえる(逆に日本人の方が作為的な笑いを示さなかったともいえる)。

この結果の解釈において、無視できないのは表示規則(display rule)の存在である。表示規則とは、本人が実際に感じている感情に関係なく、特定の状況においてどのような表情を表出するべきか(または隠蔽・抑制すべきか)ということに関する一種の社会的な規則のことである。従来の表示規則研究(e.g., Ekman & Friesen, 1975)においてはネガティブ感情に関するものが中心だが、近年ではポジティブ感情に関するものも行われている。ただし、双方ともその隠蔽・抑制に重点が置かれてきたように思われる。しかし、今回の研究ではむしろ、権威ある他者(実験者)との同室条件において幸福の表情の作為が促進されたという表示規則が韓国人に作用したと考察される(逆に日本人に作用しなかったとも考察される)。これもまた表示規則の重要な側面であると思われるが、こういった作用について更なる考察を得るためには、両国の文化的背景や現代文化に対する深い理解が必要となるであろう。

怒りの表情表出における日韓比較

今回の研究結果を見ると、韓国人大学生において特に強い怒りの表出が見られるとは言えない。事前の予測では、韓国人の方がより強い怒りの表情を表出するであろうと推測していたにも関わらず、怒りに関連するAUについて、むしろ日本人の方が多く表出していたという結果が見られたのである。

JACFEEにおける日本人の怒りの表情を構成するAUはAU4 + AU7 + AU17 + AU24である。このうち、AU4とAU7は目の部分のアクションであり、AU4 + AU7はいわゆる「眉をしかめる」という動作である。この2つのAUについては、日本人と韓国人ともに50%を超えており、両者に共通する怒りの表出であることが分かる。しかし、AU4についてはむしろ日本人の方が有意に多く見られ、日本人の方が韓国人よりも、怒りの眉を多く表出していたことになる。

一方、目とともに怒りを構成するもう一つの重要な要素は口の部分であるが、JACFEEにおける怒りの口はAU17 + AU24で構成される。この点に関して、非常に興味深い対照的な結果が出ており、AU17については韓国人の方が多く表出し、AU24については日本人が多く表出している(ともに1%水準で有意差があること

から、この点が日本人と韓国人の怒りの表情表出における形態上の相違点と言えよう。ただ、どちらのAUの表出が強い怒りの表情を示すかという論拠はなく、あくまで形態上の相違点が見られたとの指摘に留まる。

その他の(JACFEE に関与しない)AU について検討すると、日本人は顔や視線を下に下げる動き(AU54・AU64)によって怒りを表出するのに対して、韓国人は顔を左右に傾ける動き(AU55・AU56)によって怒りを表出していることが分かる。これも、日本人と韓国人における怒りの表現方法の相違点と言える。

この相違に関しては、日本人は怒りを露骨に表出してはいけないという文化的背景に基づき、顔を下に向けることによって怒りの表情を隠そうとしているのではないかと考えられる。一方で、韓国は、日本に比べて感情を表出することを是とし、人と人がぶつかり合う社会(金, 2002)であると言われているので、怒りの表情表出を隠さずに、むしろ顔の傾きによって怒りを表現していたのではないかと考えられる。

まとめ

今回の研究では、上記のように、幸福と怒りの表情表出における日本人と韓国人の相違点が明確になった。そして、必ずしも韓国人の方が日本人よりも幸福や怒りの表情を強く表出するとは言えないという結果が得られた。この結果に関する考察においても無視できないのは表示規則の存在である。今回の実験では、被験者と実験者は同室において共在していた。これが幸福や怒りの表情表出を抑制する重要な要因の一つであったことは間違いないであろう。この表示規則の作用について厳密に解釈するためには、両国の文化について深く検討する必要がある。

また、どちらの方がよりストレートに(強く・頻繁に)幸福や怒りの表情を表出したかというところまで言及するには、両国の文化的背景と現代文化に対する理解も当然必要であるが、それに加えて、幸福や怒りといった感情とそ

の表情の定義を明確にする必要がある。このように、本研究のような文化比較研究は、感情や表情に関する示唆も得られるといった点で、有意義なものであるといえよう。

引用文献

大坊郁夫・上出寛子・趙鏞珍・高橋直樹 2005 顔面表情に伴う顔形態特徴の3次元測定-韓国人大学生の場合-, 電子情報通信学会技術研究報告, 105(385), 27-32.

大坊郁夫・高橋直樹・磯友輝子・橋本幸子 2001 顔面表情の表出と解読における社会的スキルの役割 電子情報通信学会技術研究報告, 101(333), 17-22.

Ekman, P. & Friesen, W. V. 1975 *Unmasking the face*. NJ: Prentice-Hall (工藤力訳編 1987 表情分析入門, 誠信書房)

Ekman, P. & Friesen, W. V. 1978 *The facial action coding system: A technique for the measurement of facial movement*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.

上出寛子・大坊郁夫・趙鏞珍・高橋直樹 2005 韓国人の顔面表情時の顔形態特徴と社会的スキルとの関係, 電子情報通信学会技術研究報告, 103(385), 33-38.

金裕鴻 2002 韓国がわかる。ハングルは楽しい! PHP新書

マツモト, D・工藤力 1996 日本人の感情世界—ミステリアスな文化の謎を解く— 誠信書房.

註

- 1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第47回大会(2006年9月, 東北大学)、日本心理学会第70回大会(2006年11月, 九州大学)において報告された。
- 2) 韓国人についての研究は、平成16・18年度の日本学術振興会科学研究費基盤研究B(代表: 大坊郁夫)の補助を受けたものである。

Comparison of Japanese and South Korean in the facial expressions of happiness and anger by Emotion Instruction Method

Naoki TAKAHASHI (*Faculty of Human Sciences, Waseda University*)

Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Yong Jin CHOU (*Facial Studies Laboratory & Department of Cosmetology, Hanseo University, Korea*)

This study compared the groups of Japanese and South Korean individuals in terms of expressing their happiness and anger by employing the emotion instruction method. Results indicated that the ways by which happiness and anger were expressed differed across cultures. More specifically, it was found that the Korean individuals did not necessarily engage in the facial expression of happiness and anger more intensely than the Japanese counterparts. Implicit to these findings was the role of the display rules, which could potentially have an effect on the differences that were observed. Given that the experimenters and participants were situated in the same room in this study, the participants might not have been able to freely express their levels of happiness and anger. Future study needs to clarify the display rules of Japanese and South Korean individuals, so that the further understandings about the cross-cultural differences can be obtained.

Keywords: facial expression, display rule, culture comparison, happiness, anger.